

---

# 飛鳥山サーカス団

なこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

飛鳥山サーカス団

### 【Nコード】

N9029Z

### 【作者名】

なーこ

### 【あらすじ】

被疑者の移送に川口署に向かっている伊佐崎警部は、北区飛鳥山を車で通り過ぎた際、幼少期に起きた奇妙な誘拐事件の話を上司である田上課長に話し始めた。それは実在した誘拐事件なのか？それとも子供の想像上の事件だったのか……。全5話。【毎日更新で1月1日完結予定】

1

警視庁捜査一課の伊佐崎三十郎いささきみんじろう警部は、上司の田上明彦たがみあきひこ課長と、埼玉県川口市で検挙された、ある事件の被疑者を埼玉県警川口署から、本庁に移送するため、車中の人であった。彼らは、霞ヶ関から内堀通り、御茶ノ水を過ぎて順天堂大学に突き当たり、イチヨウ並木が続く本郷通りに差し掛かった頃、静寂の中で仏頂面を突き合わせているのに、耐えられなくなった。最初に話しかけたのは、いつも部下の身勝手な行動を嘆いている、田上だった。

「伊佐崎くんは、年下の僕が上司なのが、気に食わないのだろうけれど、命令違反ばかり繰り返す、部下を庇って報告書をでっち上げている、僕の心情も理解してほしいね」

田上は、単独行動ばかりで、課内の和を乱している問題児のせいで、上層部に提出する報告書に、手心を加えさせられていると、運転していた伊佐崎に詰め寄った。キャリアの田上は、彼の上司なのだから、もっと強く叱り飛ばせばいいのだが、彼の顔色を見ながら、下手に出ているには、それなりの理由があった。

「私は、事件解決に必要なとらば、必要な行動をとっているつもりだが、それが君に迷惑をかけているのなら、謝らなければいけないね」

伊佐崎は、フロントガラスに映る街並みを見ながら、気のない返事で、上司の愚痴に応えた。彼が無能な刑事だったのなら、田上も横柄な態度を見過ぎさないのだが、彼の事件解決への貢献度を考慮すれば、多少の我儘な言動には、目を瞑った方が利口だ。

「僕は、迷惑だなんて、考えたこともない。上司に対しては、気を使うことも、忘れてほしくないとお願ひしているだけだ」

「私が階級を敬うような人間だと、思っていたのかね？」

田上は、一回り歳の違う伊佐崎に、いつも小馬鹿にされていると

感じていたが、田上の持つ肩書は、実力以上の権限だと、彼の言い分を黙って聞いていた。

「わ、解ったよ。けれど、君の人事考課には、素行について、嘘の報告ばかりを載せるのも、そろそろ罪悪感が芽生えてね。君ほど優秀な刑事は、その言動さえ気を付ければ、もっと高い評価を得られるだろう」

田上は、車窓に流れる、イチヨウ並木に目を運ぶと、車内での部下とのやり取りが虚しくなった。車窓には、上富士町の交差点を過ぎると、歩道の向こう側に、高いビルを縫うようにして、深い緑の森が現れた。

「伊佐崎くん、ここがバラ園の有名な『旧古河庭園』だね。君から聞いていたより、ずいぶん大きくて、立派な庭園じゃないか」

田上は、JR山手線の駒込駅の陸橋を過ぎて、庭園の入口を振り返りながら言った。彼は、上司風を吹かせて、気分を害したであろう、北区西ヶ原に住んでいた、伊佐崎に気を使って、必要以上に「立派だ、立派な庭園だ」と、繰返して称えていた。

「いや、今通り過ぎたのは、将軍家の御側御用人の柳沢吉保が、下屋敷として造営した大名庭園『六義園』だ。子供の頃は、入園料が取られなかったから、秋になると友達を誘って、木の実などを拾いに来たものだ。路上並木は、オスの銀杏ばかりだが、庭園には、実を付ける銀杏が植わっており、ほかにも椎の実なんか拾って、焼いて食べたものだよ」

伊佐崎は、『六義園』の講釈を終えたとき、助手席の窓を指した。「ここが君の間違えた、バラ園のある『旧古河庭園』だ。門構えは、大名屋敷に比べれば、見劣りするかもしれないが、高低差を利用した、西洋館から見下ろす庭園の眺めは、見応えがある。バラ園は、春と秋の年二回、バラが見頃を迎えるが、そろそろ秋バラが咲き誇るシーズンだね」

「君の生まれ育った、西ヶ原界限には、ずいぶんと名勝が揃っているのだね、地方出身者の僕には、馴染みのない地名だったけれど、

今度の休みにでも散策してみよう」

田上は、先ほどの会話で、不貞腐れていた伊佐崎が、得意気に話すのを聞いて、機嫌を直したと、会話に弾みがついた。田上は、川口署まで他愛もない話題で、場を繋ごうとしたものの、『旧古河庭園』を過ぎて、しばらくすると、伊佐崎は、眉間にしわを寄せて、表情が険しくなった。

田上は、目の前を路上電車が塞いでいたが、伊佐崎が、そんな理由に腹を立てていると、思えなかった。伊佐崎は、中央分離帯の向こう側にある『飛鳥山公園』から、意識的に視線を背けているようだ。彼には、公園に纏わる、面白くない思い出でも、あるのだろうか。

「この公園は、知っているよ。公園の下を通り抜ける、首都高速のトンネルが、十年前に開通している。北関東の実家から、渋谷の住まいに帰るとき、このトンネルを利用するのだが、僕の古いカーナビだと、道案内してくれないから、自然と覚えてしまった」

伊佐崎の表情を読み解けば、無暗に触れれば、面倒な会話になると、解っていたのだから、無視をすれば良かったのだが、藪を突いて蛇を出すのは、刑事の職業病かもしれない。

「君は、私の報告書をでっち上げているそうだが・・・」

「報告書の嘘は、そんな大袈裟なことじゃない。君が報告や相談もなしに、勝手に動き回るものだから、出先を適当に書いてるくらいだ。でも、これからは、君が心を入れ替えて、事後報告だけでもしてくれるのなら、僕も大助かりだ」

「いいや、そんな話は、どうでも良いのだ。君は、自分が吐いた嘘と、現実の区別がつかなくなった、そんな経験があるかね？」

田上は、「どうでも良くない」と思ったが、伊佐崎の真剣な表情を見て、彼の質問が苦悩の原因だと、理解した。嘘と現実の区別は、当の本人ならば、見分けがついて当たり前だ。他人の吐いた嘘は、現実との見極めが難しいと思うが、彼の質問の答えに適切ではない。「嘘から出た真は、何度か経験したことがあるが、君が聞きたい話

と、少し違っている気がする。自分が吐いた嘘は、自覚を伴うものだから、精神に疾患でもなければ、有り得ないと思うよ」

「確かに、君の言うとおり、精神を病んでいなければ、そんな状況に陥ることがないだろう。だが、私は、子供の頃、周囲の大人たちに、誘拐事件に巻き込まれたと、嘘を吐いて困らせたらしい。周囲から否定されて、それが嘘だと認識していたはずなのに、ある時期になると、本当に誘拐されたことが、あったのではないかと、現実の出来事だったと、誤認するようになった」

「なるほど、子供の頃の記憶は、誰しも曖昧なものだから、自分が吐いた嘘と、現実の区別がつかなくなることも、あり得ない話ではないね。そういった類の話なら、僕にも経験があるよ」

「私は、記憶力が良い方だと、自負しているのだが、子供の頃に遡ると、間違った記憶が多いのに、驚かされるのだよ」

伊佐崎は、飛鳥山公園を通り過ぎると、王子駅の高架橋下で、路面電車を見送った。田上は、彼の記憶力が良いのを認めているが、それが事件に関することだけだと、知っていた。今年の夏は、捜査一課のベランダで『緑のカーテン』を設置することになり、彼にゴーヤの苗を買いに行かせた。すすく育ったゴーヤは、真夏の太陽をから、捜査一課の面々を守ってくれたが、ぷっくり実ったヘチマは、彼らの食欲を満たしてくれなかった。

「君が、本当に記憶力が良ければ、ゴーヤを植えてヘチマが実ることとは、ないと思うのだが・・・それに、僕が貸している金も、すぐに戻ってくると思うよ」

田上は、嫌味を言ったが、彼が不敵に笑うのを見て「ゴーヤの苗で使い走りにされたのが、そんなに気に食わなかったのか」と、真夏の怪異、ヘチマ事件の真相を理解した。

「君が子供の頃に、本当に誘拐されていたのなら、犯人が逮捕されているに違いない。戦後の国内誘拐事件は、三百件弱あるが、未解決事件は、たった八件のみだからね。ちょっと調べてみれば、誘拐事件が嘘か、現実か、すぐに解ることだよ。君が真実を知りたいの

なら、捜査一課で留守番をしている、神谷刑事に調べさせようか？」

田上は、携帯電話を取り出したが、伊佐崎が首を縦に振らないので、どうしたものかと、手持ちぶさたに、なつてしまった。

「私の誘拐事件は、やはり偽の記憶だと思うね。私は、想像力が豊かな子供だったから、色んなイマジネーションの世界に生きており、誘拐事件の記憶も、そうした空想の産物だったと思う」

と、伊佐崎が言うと田上は、携帯電話をポケットに戻してから、退屈凌ぎに、その誘拐事件の話を聞かせる、犯人を捕まえてやると豪語した。伊佐崎は、上司が鼻息荒く、話の続きを催促するので、少し躊躇ったものの、「架空の事件だ」と前置きしてから、昭和五十三年の飛鳥山公園で起きた、誘拐事件の話をはじめた。

伊佐崎と田上は、被疑者の引取りに向かう車内で、期せずして、思い出の誘拐事件の謎解きに、挑戦することになった。これが、『飛鳥山サーカス団』事件の開幕を知らせるベルだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9029z/>

---

飛鳥山サーカス団

2011年12月28日11時49分発行